

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五・六（公衆）四七二二（七）七二〇七

革マル松崎による「除名」処分弾劾

全国のたたかう国鉄労働者のみなさん。いま、動労「本部」の中では、革マル松崎による「動労の私物化」「ファシスト支配」に対して怒りが渦巻き、勇気ある反撃が開始されている。五月十七日、動労広島地本は、同日開かれた第一〇〇回臨時地方委員会において、同地本前三次（みよし）支部委員長・井面義信氏に対し、「5・17国鉄労働者集会」の呼びかけ人になつてゐることを理由に、全く不当にも「除名処分」を行った。これは、反撃の嵐の拡大に恐怖した革マル松崎の悲鳴そのものである。全国の心ある国鉄労働者は、革マル松崎の「動労の私物化」―七月解散を絶対に許さず、闘う動労の旗を守りぬき、動労総連合へ結集せよ。「動労千葉とたたかう国鉄労働者をはげまし連帯する6・20集会」へ全国から結集せよ！

勇気ある反撃の開始

五月十七日の井面氏への「除名処分」は、同日行われた「中曽根政治と対決する国鉄労働者集会」のスローガンが、国鉄「分割・民営化」反対、新会社発足糾弾、北海道・九州の仲間に対する大量差別解雇攻撃を許すな、労働戦線の右翼的再編反対というものであり、この集会の呼びかけ人に井面氏が加つてゐることが、鉄道労連への敵対であり組織破壊攻撃である、との理由で一方向的に行われたものだ。

しかも、本来ならば、査問委員会の設置、本人への事情聴取などを行わなければならぬはずが、動労革マルはこうした規約さえ一切無視し、「除名」をゴリ押ししたのである。

これに対して広島では革マルのファシスト支配に対する怒りが渦巻き、勇気ある反撃が開始されようとしている。

「除名」処分は松崎の悲鳴

動労革マル松崎による今回の広島地本での「除名処分」なるものは、動労内における革マルのファシスト支配に対する怒りが充満し、何よりも、動労千葉―動労総連合の存在を最大の拠り所にして不屈に闘い続ける労働者がいるということに対して、革マル松崎が激甚に反応し、

同時に悲鳴をあげたということである。

動労組合員の心情など一切無視し、革マルの延命のために組合員を当局に売り渡し、さらに、自らも権力のフトコロに飛び込み、「虎の威を借るキツネ」よろしく労働者の背後から襲いかかつてくるような連中に対して、「鉄道労連と訣別しよう」と反撃に起ち上るのはあまりに当然のことである。これこそいま本当に望まれている闘いである。

真紅の旗を翻し

動労総連合へ結集せよ

全国のたたかう国鉄労働者のみなさん。とりわけ、動労内で不屈にたたかうみなさん。

革マルによる動労の「私物化」―七月解散を絶対に許してはならない。たたかう動労の伝統をしっかりと守りぬき、真紅の旗を翻し、勇気をもって動労総連合に結集し、鉄道労連を解体せよ。動労総連合こそ真の「動労」の継承者だ。

「動労千葉とたたかう国鉄労働者をはげまし連帯する6・20集会」へ全国から結集しよう。

速報

6月7日、広島
で西日本動労
結成される。次号

声 明

私は、不当な『匿名処分』攻撃と対決する。

— 今の『勤労』方針では労働者の生活と権利は守れない。 —

勤労広島地本（中村二郎委員長）は五月十七日急遽開いた第一〇回臨時地方委員会なるものの名において私の匿名処分を決定した。この処分は、査問委員会設置も、本人への事情聴取もなされていないもので、手続きにおいて内容においても全く不当なもので、断じて許すわけにはいかない。

今、「勤労」本部、松崎一派は、全く労働者の心情を無視し、労働者を犠牲にして、一部幹部の延命のために、権力に対して命令を出している。

戦後政治の総決算を標榜する中曽根行革の根幹である国鉄分割・民営化を自らの率先して担い、労働者に対しては、三本柱（退職、一時解雇、派遣）のクリ

アを強制し、生き生きとしていた職場を地獄の底にたたき落した。

三次でもツグ派遣で「病人」同然となつて帰つてきた仲間が何人もいるではないか。この仲間には、組合員「勤労」は、どのような手をさしのべたという

のな、心から労働者同士の階級闘争になつて援助したのは、今の「勤労」か

針に反対して聞いている一部活動家は、はな、このことは勤労三次支部の組合員が一番良く知っている。

四月一日、戦後日本の産業復興に多大な貢献をし、高度成長の中心を担つてきた国鉄をつがし、分割・民営化が強行された。分割・民営化してどのような

会社になるというのか。新会社は黒字決算を至上命令としており、発足時において黒字予算を組んでいる。全国で十何兆円といふ負債をまなえた新会社が黒

字経営をするためには、人員削減、合理化、ローカル線の切り捨て以外にない

のである。四月一日、新会社発足以後、マル生攻撃は急速に激しこの度を加えてきている。各職場で取り組まれている「〇〇会」「××グループ」は、なつ

ての生産性向上運動の現代版である。過去、勤労はマル生紛争闘争を中心にな

つて取り組み、勝利し、明るい職場を取り戻した経験がある。

今、再び労働者の口を封じ、当局の言いなりになる労働者づくりのため、マル生を復活したのである。勤務時間を全く無視した増収活動、踏切監視、Q

運動など労働者は二十四時間、身も心も会社につかれて、ボロボロにされようとしていく。こんなことを良いのか。断じて否だ。労働者は奴隷ではない。私

私は、今までにも職場、当局から恫喝されてきたが公表したことはない。恥

辱の緒が切れるということがあるが、今回の攻撃はまさにこのことである。

職場・当局の恫喝と差別を許すな

五月十八日、区長は私の非難、公休の時の所在について質問した。おそらく勤労地本から「匿名処分」の連絡をうけていたのだとある（非難、公休は、当局の監視下におかれる理由は何もない。そのやりとりの中で区長は「おなか

だを大切にしながら」といふ言葉で恫喝してきたのである。一般的に聞けば、おことに親切に聞かせる言葉だ。誰か考えてもこれは脅し以外のなにものでもない。

さらに許さないのは、明るい職場づくりについて話している中で、私が「明るい職場をつくるには、区長が率先して対応すべきである。乗務員の職務態度

を運転室の陰からコソコソ監視するなどは、最も職場を暗くするものではないか」と言つたことに対して「おぼたが、冬にせやく言われることはない」と

全く人間を人間と思わぬ態度をしたのである。

全組合員のみなさん、いこう上きな言葉で社員を信頼すること、明るい職場づくりをうたがひてお、ここに人間を差別し、屈辱させようとしていることの本音があらわではないか。

当局と一体となった「鉄道労連」と差別し、労働者の語りもとより戻すために立ちあがろう

われわれ国鉄労働者は、今まで一貫して生活と権利を守るため、日本が再び侵略戦争に突入しないため、あらゆる闘いを裏面に取組んできた。今、私は、中曾根と一体となつた当局の攻撃に屈服してしまふは、全国民が日本の海外侵略、軍事大国化の役にのみまされてしまう。身にも働く者の誇りをとちとし、生活と権利を守るために、立ちあがらう。

一九八七年五月二十二日

勤労三次支部

井面義信

外：勤労組合員有志一同